

博士学位論文要約

論文題目： アメリカのテレビドラマにおけるアジア系女性像
-1970年代から2000年代の関係性の変遷を中心に-

氏名： 侯野 裕美

要約：

本論文は、1970年代から2000年代のアメリカのテレビドラマに登場するアジア系女性の表象を考察したものである。特にアジア系女性が作中で築く、他の人物との関係性に焦点を当て、彼女たちが人物同士の中でどのように受け入れられてきたのか（これをヨシハラ(2003)の著書より着想を得て「抱擁」という言葉で表した）を各時代の社会的、文化的背景と共に論じた。

第0章は序論として、本論文の目的が研究蓄積の少ないテレビドラマにおけるアジア系女性の表象の変遷にあること、そして表象を論じるにあたって基礎的な知識となる、アジア系の人々がアメリカで辿ってきた歴史などについて述べた。

第1章では、先行研究の動向と検討を行った。比較的研究の蓄積の多い、映画におけるアジア系表象を中心に概観し、彼らを描く時に用いられるステレオタイプの類型について説明した。そしてアジア系女性は、「アジア」を象徴する存在として描かれる傾向にあることを論じた。これまでの研究では、対象が映画であってもドラマであっても共通して、アジア系の人物描写そのものに焦点を当て、ステレオタイプや侮蔑表現の存在を指摘し、彼らがいかに排除されているかという点から分析されることが多かった。しかし、アジアの文化や人々は古くから、メディア上で積極的に求められ、取り込まれてきた存在でもある。そのため、排除の観点のみでは不十分といえる。そこで、本論では人物像に注目するのではなく、アジア系の人物が作中で築く他の人物との関係性に焦点を当て、彼らが人間関係の輪の中でどのように受け入れられてきたのか、つまり抱擁されてきたのかという見方から分析を行うことにした。

第2章では、研究の手法を述べた。理論的背景としては、メディア表象とはヘゲモニーのせめぎ合いが行われる場であるとするホール(1997)の理論を採用した。また、分析対象としては、視聴者層の厚いネットワーク局のテレビドラマに登場する、アジア系女性とした。上述の通り、アジア系女性はアジアを象徴する存在であることがその理由である。更に、身体的な似通りから、相互に交換可能な人々として扱われてきた中国系、日系、韓国系の女性を対象を絞った。分析するドラマは、正確な情報が手に入る1970年代から2000年代の作品とする。手法としては、次の二段階を設定した。①時代の変遷を追うため、アジア系女優が1シーズンに5割以上出演したドラマを調べて10年ごとに区切り、リストを作成する。このリストには、ドラマの簡単なあらすじを記した上

で、主人公、もしくは主人公級の人々（主人公を明確に定めない形式のドラマの場合）にとってアジア系女性の役がどのような関係性にあるのか（友人、恋人、部下、上司、あるメンバーの一員、など）を記載し、各年代でどのような関係が描かれる傾向にあるのかを把握する。②次に、実際の作品を視聴し、アジア系女性が他の人物との関係性の中で、具体的にどのような関わり合いをしているのかを調べる。これには、ストーリーを追えるだけのエピソード数があり、アジア系女性がドラマの中でコンスタントに特定の人物と接するほど、重要な役所として設定されていることが望ましい。そのため、リストの中からドラマ自体が 30 エピソード以上続き、1 つのシーズンにアジア系女性が 8 割以上出演している、DVD または VHS 媒体で視聴できる作品に絞った。この条件を満たす作品には、8 作品が該当した。この 8 作品の分析では、アジア系女性が出演する場面の会話を全て文字に書き起こし、作品の中で彼女たちが長い期間に渡って何度も会話の機会を持ち、かつ重要な関係性を築いている人物を特定することにした。そしてその人物との間で繰り返される会話のパターンを抽出し、両者の関係の特質を明らかにする方法を取った。

第 3 章からは、具体的な分析を行っている。1970 年代のアジア系女性が出演するドラマをリストにすると、彼女たちは主人公たちのために側に控え、補助をする関係性を築く傾向が見られた。詳細な表象分析を行う『ザ・コートシップ・オブ・エディーズ・ファーザー』（1969-72）でも、ミセス・リビングストンという日本人女性がハウス・キーパーとして妻を亡くした白人の父子のもとで働いており、主人公の補助をする関係性が存在した。この三人は実際の家族のように描かれている。しかしリビングストンは作中で、自ら積極的な自己犠牲をして、父子の性的自由を維持する言動を繰り返していた。この父子は、アメリカ社会で理想とされる白人のマスキュリニティを体現したような人物であり、リビングストンは自己犠牲を通して理想の白人男性の性的自由を守っていたのである。このような 70 年代の関係性を、冷戦構造を中心とする当時の社会状況と共に考察したところ、アメリカは家族のような温かさの中で多人種、多文化が共存できる人種的寛容さを持った国であることを示しながら、資本主義国であるアメリカのヘゲモニー、白人男性優位の社会構造を支持し、維持しようとする機能があることを指摘した。つまり、70 年代の抱擁は、アジア系女性と他の人物が既存の体制を維持、強化する関係性を築くという条件の下で行われていたといえる。

第 4 章で扱う 1980 年代では、主人公を補助し、妻などの家庭化された関係を築く傾向が見られた。分析を行う『セント・エルスウェア』（1982-84）に登場する日系女性、ウェンディは研修医であり、この傾向とは反している。しかし、彼女は他者との関係性の中で、人の感情に共感を示さない、もしくは冷淡な態度を取ることを繰り返し、その異質性が際立っていた。そして周囲からは距離が生じ、孤立した様子で描かれていた。この時代の関係性を日本の経済力が上昇し、アジアが脅威そのものとして認識されていた 80 年代の社会状況と共に考えると、補助を行う、または家庭化されたアジア系女性はイエローペリルとは

真逆の、既に脅威の要素が抜き取られた関係性の中にあったといえる。こうした傾向の中で、女性の医師であるウェンディは出過ぎてしまった。それ故に誰とも密な関係を築くことなく周囲から孤立し、その脅威が遠方へと追いやられる描かれ方をされてしまったのである。80年代のアジア系女性の抱擁は、脅威が除去された、安全な関係性を築くという条件下で可能なものであったといえる。

第5章では、1990年代を扱った。この時代のアジア系女性は、秘書やアシスタントなど、誰かを補助する関係性もあれば、クラスメイトや同僚、友人など、対等な立場の場合もあった。多様化、平等化された関係を築くようになり、進歩的な表象が出現し始めた。本章では、『ツイン・ピークス』(1990-91)、『ER 緊急救命治療室』(1994-2009)、『アリー my love』(1998-2002)の三作品を詳しく分析した。これらの作品には革新的な関係性が明確に描かれる一方で、アジア系女性は何らかの形で理想のアメリカを象徴する人物によって、保護され、慈悲を与えられ、指導される関係性を築いてもいた。このような90年代のアジア系女性の関係性を社会背景とともに考察した。この時代は、アジア、特に中国文化の流行や、中国系女性が目覚ましい活躍を遂げた時期であり、それ故にドラマの中でアジア系女性が形成する関係性にも向上がみられた。しかし同時に、日本に代わって中国経済が台頭を見せ、新たな脅威として認識された時期でもある。そのため、関係性において、理想のアメリカを体現する人物によってアジアの迫り来る脅威を押さえ込もうとする機能が内包されたと分析した。90年代は、アジア系女性を対等で多様な関係性で抱擁しつつも、そこにはアジアの脅威を押さえ込むという制限が付け加えられているのである。

第6章は、2000年代を論じた。アジア系女性の関係性は、90年代に増して多様化、平等化が進むようになった。それだけでなく、彼女たちは物語の進行上、重要な関係性を築く兆しが見られるようにもなった。アジア系女性は関係性の中で自主性を発揮し始めたのである。次に『ロスト』(2000-10)、『グレイズ・アナトミー』(2005-継続中)、『グリー』(2009-15)の三作品について考察した。通例のアジア系表象では、アジア系女性と白人男性の恋愛が多く描かれるが、これらの作品においては、アジア系の男女の恋愛が描かれていたり、アジア系女性と白人女性が親友として互いに助け合う関係が描かれていたりしていた。これまで最も進歩的な関係性である一方、白人やアメリカの主流文化を頂点に置こうとする側面も存在した。2000年代のアメリカ社会では、テレビドラマの人種構成や描写を改善しようという気運が高まり、またアジア文化の流行も前年代と同様に続いていた。こうした中、アジア系女性が築く関係も最も革新的なものとなった。しかし、白人のヘゲモニーを保とうとする手綱も存在し、潜在的なアジアの脅威を阻止する描写も見られた。つまり2000年代のアジア系女性はこれまでの年代とは異なり、多様かつ平等な枠組みの中、自らが持つ力や自主性を発揮することが可能な形で抱擁されるようになった。しかし、そこには脅威となり得るアジアを支配する片鱗も残されているのである。

第7章では、これまでの表象の変遷をまとめた。70年代の補助の関係性から2000年代では多様化、平等化が進み、アジア系女性が主体性を発揮する関係性が描かれるように

なり、時代を経るに従って、表象は改善したといえる。表象に改善を与える要素は多様にあるが、その一つの可能性として、メディア上でのイメージ向上を求めて行動してきたアジア系の活動団体の歴史を調べた。団体は、1970年代頃から誕生し、90年代で発展期、2000年代で円熟期を迎えた。本論の分析でも90年代を分岐点として表象が改善しており、アジア系団体の活動が、テレビドラマの表象に何らかの影響を与えたことが指摘できる。

現代は「ポスト人種」社会とされ、人種差別や偏見は否定されるべきであるという考え方が人々の間である程度共有されているといわれる。このような社会において、表象を差別や排除の側面から論じるだけでなく、アジア系がいかんして取り込まれたかという観点を取り入れることは、有効な分析視点であったと考えられる。加えて、研究蓄積の少ないテレビドラマを対象にすることで、今後のアジア系表象の研究動向に新たな展望を加えることができた。